

令和2(2020)年産なし管理ポイント(第1報)

令和元(2019)年12月 日
塩谷南那須農業振興事務所経営普及部

☆今回の重点ポイント

- 品種特性、樹勢、花芽着生状況を考慮した整枝せん定の実施
- 黒星病の第一次伝染源となる「落葉」の処理徹底
- 粗皮削りによるハダニ類等の越冬密度低減

1 整枝せん定

(1)各品種共通(基本事項)

- ・骨格となる主枝、亜主枝を明確にする。
- ・主枝、亜主枝、側枝の先端部は、常に強く伸び出す樹勢を保つ。
- ・花芽着生状況を良く確認し、必要数を確保する。
- ・せん定は樹液流動が始まる前(3月上中旬)までに終了させる。

【参考】花芽着生状況(管内11月29日現在)

品種名	短果枝維持率%		えき花芽着生率%	
	2年生枝	3~4年生枝	予備枝	新梢
幸水	36~62	35~43	34~47	15~22
豊水	53~68	35~46	28~46	27~33
にっこり	53~72	47~61	39~50	25~39

※花芽の維持率・着生率は、園地により差があるが平年並~平年よりやや多い。

(2)幸水

- ・短果枝の維持率が低い4年枝以上の古い側枝はできるだけ長果枝に更新する。
- ・重要なのは、新梢葉ではなく「果そう葉」の確保。
- ・3年生以上の短果枝は、次年に更新することを見越して付近に予備枝を配置する。
- ・花芽確保だけを考慮して、棚下が暗くなるような側枝配置にしない(例、側枝から側枝を取るような整枝等)。
- ・貯蔵養分の消費を少なくするため、古い短果枝(ショウガ芽)を整理する。

(3)豊水

- ・短果枝中心の配置を基本とするが、4年以上使っている側枝はできるだけ更新する。
- ・成木になると樹勢が弱くなるので、できるだけ予備枝を配置して樹勢維持を図る。
- ・樹勢維持のための予備枝は細めの新梢を使い、切り戻したあとの長さは幸水よりやや短めでよい。
- ・みつ症・す入り症等の果肉障害は、樹勢が弱い樹で発生しやすいので、適正な樹勢を維持できる側枝配置に心がける。
- ・樹勢が弱い場合は、主枝・亜主枝を数年かけて切り詰め樹冠面積を小さくしながら樹勢維持を行うか、改植を検討する。

【参考】主要品種の必要花芽数の目安（成木園）

項目	幸 水	豊 水	にっこり
目標収量	3,000kg/10a (商品率90%)	3,700kg/10a (商品率90%)	6,000kg/10a (商品率90%)
目標中心階級	28玉(370g)～24玉(430g)	24玉(430g)	7玉(750g)
最終着果数	9,000果/10a 10果/樹冠1㎡	9,500果/10a 11果/樹冠1㎡	9,000果/10a 10果/樹冠1㎡
樹冠面積占有率	85～95%	85～95%	85～95%
必要花芽数	15芽/樹冠1㎡	17芽/樹冠1㎡	15芽/樹冠1㎡

※必要花芽数は、最終着果数の1.5倍を確保目標とする。

(4) にっこり

- ・永久樹4間植えの場合、二次間伐は行わず、一次間伐のみで棚面を埋めていく方が反収が高い。
- ・永久樹の主枝先端がしっかり伸びている樹勢を保てる樹冠面積を維持する（主枝先端が弱ってしまうところまで樹冠拡大しなくてよい）。
- ・亜主枝配置位置よりも先の主枝上から新梢の発生が少ない場合は、亜主枝を数年かけて切り詰め、亜主枝を抜くか更新する。
- ・ふところ近くの太い側枝、暫定亜主枝は早めに除去（数年かけて切り詰め）する。
- ・結果枝は短果枝を中心に配置する。樹冠拡大中は4～5年を目安に更新する。
- ・主幹に近い側枝に着果させた果実は、着色が遅く（悪く）糖度も低い傾向があるので、できるだけ離れた場所から側枝を確保・配置する。
- ・側枝間隔は35～40cmを目安に配置する。ただし、樹勢が弱い場合は樹勢維持のためには目安よりも側枝配置数を増やした方がよい。
- ・新梢の発生は少ない品種であるが、側枝を切った場所からは比較的新梢が出やすい。発生した新梢はできるだけ予備枝として利用する。
- ・側枝が少ない場合、果台を残して花芽の切り落としを行うと新梢発生を促すことができる（ただし誘引しづらいので注意）。
- ・主枝上には果実を着果させない（樹冠拡大・樹勢維持にマイナス、新梢が発生しにくくなる、果実品質が劣る等の理由のため）。
- ・みつ症・果肉褐変等の果肉障害は、高接ぎ樹や側枝配置数が少ない（日焼け果が発生しやすい配置）、古い短果枝（4～5年生枝）、樹勢の弱い樹等で発生しやすいので、適正な樹勢を保てる側枝配置に心がける。
- ・樹勢が弱い場合は、無理に樹冠を拡大せず、主枝延長枝がある程度強く伸び出す樹勢を保てる樹冠面積を維持する。

(5) その他品種

- ・「あきづき」の休眠期の枝は、他の品種に比べ硬い（誘引時に折れやすい）ので、棚付けは樹液流動が始まってからの誘引がよい。

- ・「あきづき」の短果枝養成のため、今年伸びた1年枝の先端を1/3～1/4程度切り戻し棚面に対して30度程度の角度をつけて誘引しておく。

2 病虫害防除

(1) 落葉処理

黒星病の第一次伝染源となるので必ず実施する。

① 実施時期 完全落葉後～2月末

② 実施方法

i) 熊手やブローア等を使って、落葉を処理しやすい場所（機械の走行路等）までかき出す。

※ ほ場周囲の落葉も伝染源になるので、ほ場内にかき集める。

ii) ハンマーナイフモアで落葉を細かく砕く。

iii) ロータリーでほ場にすき込む。

(2) 粗皮削り

ハダニ類、シンクイムシ類、カイガラムシ類等の越冬密度を低減するために積極的に実施する。

(3) その他

なし果実に汚果病、そばかす症などの発生が多い園は、隣接する雑木林等を伐採する等の対策をとり、光環境と通風環境の改善を行う。

3 その他

(1) 苗木の凍害防止対策

近年、定植した苗木が凍害を受けたことにより枯死する事例が多い。秋植え、春植えともに必要に応じてワラ巻き等の防寒と乾燥防止処理を行う。

(2) 長期予報

① 関東甲信地方1か月予報（12/7～1/6） 12月5日気象庁発表

○特に注意を要する事項

・2週目は気温がかなり高くなる見込み

○予想される向こう1か月の天候

・平年に比べ晴れの日が少ない。

○各階級の確率

・気 温 低 い10% 平年並20% 高 い70%

・降 水 量 少ない20% 平年並30% 多 い50%

・日照時間 少ない40% 平年並40% 多 い20%

② 関東甲信地方3か月予報（12月～2月） 11月25日気象庁発表

○予想される向こう3か月の天候

・12月 平年に比べ晴れの日が少ない

・1 月 平年と同様に晴れの日が多い

・2 月 平年と同様に晴れの日が多い

○各階級の確率

・気 温 3か月 低 い20% 平年並40% 高 い40%

12月 低 い20% 平年並30% 高 い50%

1 月 低 い20% 平年並40% 高 い40%

・降水量	2月	低い	30%	平年並	30%	高い	40%
	3か月	少ない	30%	平年並	30%	多い	40%
	12月	少ない	20%	平年並	40%	多い	40%
	1月	少ない	30%	平年並	30%	多い	40%
	2月	少ない	30%	平年並	40%	多い	30%



気象災害による農業被害を未然に防ぐため、
技術対策情報が 携帯電話等に直接メール配信される
「とちぎ農業防災メール」のご登録をお願いします！

併せて、気象警報・注意報等が直接メール配信される
「栃木県防災メール」のご登録をお願いします！



↑「とちぎ農業防災メール」

登録はコチラから



↑「栃木県防災メール」

仮登録はコチラから